

フリーダム 掲示板



親子で楽しく自然を学ぼう!!

今年で2回目を迎える「安威川フェス」。音楽やパフォーマンス、カフェなど楽しいイベントが満載です。中でも、安威川の生物多様性を考える「安威川フリーダム」メンバーは、周辺の自然をテーマにした展示やミニゲーム、それぞれの専門家の先生がみなさんの疑問や質問に答えたり、楽しい一日を提供します。知っていたこと、知らなかったこと。安威川の自然が大好きになれる体験いっぱいです。詳しくは安威川フェスティバル2015のチラシをご覧ください。



アマゴのつかみ捕り&塩焼き 食文化としての川魚と安威川の自然を体感。

皆さんは安威川に漁業協同組合があることを知っていますか？ 安威川上流部の車作にあり、現在97名で運営している年々釣り客が減少し運営が難しくなってきましたが、5年ほど前からアユやニジマス・アマゴを使った「魚のつかみ捕り」を開催したところ、どんどん人気が出て、今では待ち遠しく思ってくれる子どもたちもいます。今年の安威川フェスでは「アマゴのつかみ捕り&塩焼き」を開催します。このイベントのテーマは3つ。1つ目は「みる」です。簡易プールに生きたアマゴを泳がせ、その動きや姿を観察してもらい、アマゴの習性や特徴を体験的に学んでもらいます。2つ目は「ふれる」。簡易プールに飛び込んで自分でアマゴを捕まえます。アマゴは運動能力の高い淡水魚なので、元気なうちはなかなか捕まえられません。少しずつ追い込み、捕まえられた時に獲物をつまむ楽しさと楽しさを同時に体感。自然を直に感じてもらうことができます。3つ目は「たべる」。捕まえたアマゴに塩をふって竹串をさして表面がアメ色になるまで焼き、美味しくいただきます。捕まえなければもう少し生きていたアマゴ。皆さんのために命を差し出してくれたと思いながら、命の尊さ、自然の恵の大切さを感じてもらえればと思っています。「みる」「ふれる」「たべる」をテーマに、これからも安威川の自然と命を考える安威川上流漁協組合は、皆さんとの交流をどんどん深めていきます。ぜひ、安威川フェス会場で笑顔を見せてください。



同時に体感。自然を直に感じてもらうことができます。3つ目は「たべる」。捕まえたアマゴに塩をふって竹串をさして表面がアメ色になるまで焼き、美味しくいただきます。捕まえなければもう少し生きていたアマゴ。皆さんのために命を差し出してくれたと思いながら、命の尊さ、自然の恵の大切さを感じてもらえればと思っています。「みる」「ふれる」「たべる」をテーマに、これからも安威川の自然と命を考える安威川上流漁協組合は、皆さんとの交流をどんどん深めていきます。ぜひ、安威川フェス会場で笑顔を見せてください。

同時に体感。自然を直に感じてもらうことができます。3つ目は「たべる」。捕まえたアマゴに塩をふって竹串をさして表面がアメ色になるまで焼き、美味しくいただきます。捕まえなければもう少し生きていたアマゴ。皆さんのために命を差し出してくれたと思いながら、命の尊さ、自然の恵の大切さを感じてもらえればと思っています。「みる」「ふれる」「たべる」をテーマに、これからも安威川の自然と命を考える安威川上流漁協組合は、皆さんとの交流をどんどん深めていきます。ぜひ、安威川フェス会場で笑顔を見せてください。

安威川上流漁業協同組合 組合長 角野一雄

時間 午前10時～。用意したアマゴ300匹がなくなり次第終了。



オリジナル缶バッジづくり

安威川の生きものを描いて缶バッジにしよう。



安威川には、さまざまな生物が棲息しています。会場にはアマゴだけでなく、オイカワ、カワムツ、カマツカなどの淡水魚やカメなどの生体展示をする予定です。また、昆虫類の標本も。専門家の先生から学んだことを覚えるために、生きものを描いて自分だけの缶バッジをつくりましょう。安威川の思い出づくりにどうぞ。

淀川管内河川レンジャー 石山郁慧

時間 午前10時～。用意したバッジがなくなり次第終了。

大阪府安威川ダム建設事務所ホームページ
<http://www.pref.osaka.lg.jp/aigawa/>

安威川ダムおよび周辺のファンづくり会の情報サイト
<http://www.aigawa.jp/>

安威川



2015
Vol.2

フリーダムとは、英語で自由という意味。自由で楽しい水辺の環境をみんなで守っていきましょう。

あいがわ自然史博物館

「森の賢者」「物知り博士」などの愛称で親しまれているフクロウ。面のような顔に大きな目が特徴的で、物語や映画などにも登場する愛嬌あるキャラクターです。昼間は樹上や樹洞で目を閉じて休息し、日が落ちる頃から獲物を待ち伏せ、羽音も立てずに急降下して捕らえるので「森の忍者」とも呼ばれています。この羽音を立てない特殊な翼の形は、新幹線のパンタグラフや風力発電のプロペラのデザインの参考にもなっています。

食性は動物食で、ノネズミやリス、カエルやカブトムシ、セミなどを食べる猛禽類です。鳴き声は「ゴッホウ ゴロツケ ゴッホウ」と聞こえ、この声を日本語に置き換えた「聞きなし」の「五郎助奉公」「ポロ着て奉公」は有名です。また、フクロウは「福老」や「不苦労」という当て字から、縁起物のお土産や工芸品にもなっています。安威川水系の山間部でも春頃につがいで巣作りを始め、秋頃にヒナが独り立ちする姿が確認されています。

森の忍者 梟(フクロウ)
Strix uralensis フクロウ目フクロウ科



たくさん生息しているわけではありません。限られた地域、巣作りや餌捕りに適した環境でしか見られないため、安威川水系にフクロウがいることは、あまり知られていないのです。フクロウが暮らしやすい安威川の森をみんなで守り、大切にしていきたいですね。

特集 森へ行こう、森を感じよう。

茨木の山間部に広がる里山林が他の地域と違うわけ。

北摂連山はほぼ同じような標高で、生物相も同じように多様で豊かです。

でも、里山の林道や自然公園に出かけた時、他の山々との違いに気づきます。

生い茂った森の中は、薄暗いイメージがありますが

茨木の山間部は光が差し込む明るい森が広がっています。

さて、茨木の森が明るい「そのわけ」は？



オオタカ



林道には栗の木が多く、秋には栗がいっぱい実ります。

約100年前の茨木の植物の地図を見ると、アカマツという常緑針葉樹が広い面積に生えていたことがわかります。アカマツはマツタケとたいへん仲が良く、そのころの茨木の山間部ではマツタケがたくさん採れていたそうです。



秋から冬、安威川周辺は光が地表までとどろく明るい森が広がります。

では、どうして茨木にはアカマツがたくさん生えていたのでしょうか？今のようガスや電気が手軽に使えるようになる以前、だい

たい今から50年ほど前まで、人々はまきや炭を使って火をおこし、食事の準備をし、お風呂をわかしたりしていました。人がたくさん住んでいたところを「里(さと)」と呼びますが、茨木の里に近い山の方では落ち葉や枯れ枝やまきが盛んに採られて、燃料として利用されていました。また、車作を中心とした地域では、里から遠くはなれているので、運ぶのに重いまきよりも炭の生産(炭焼き)が盛んで、そのための落葉広葉樹(コナラ、クヌギなど)の林がありました。当時は水田やため池と林がセットになって人々の生活を支えていたのです。



樹冠な里山を守るために適度に木を切る間伐が行われています。

最後の氷河期が終わり、茨木が涼しかったころにはアカマツにまじって落葉広葉樹が多く生えていました。そのうち気温も高くなり、茨木でも常緑広葉樹に適した気候の地域が広がってきました。自然のままなら、元気な常緑広葉樹がアカマツや落葉広葉樹を追い出して広がるのがよくあるのですが、茨木では人々が燃料用に、木の種類にかかわらずにさかんに木々を切っていたので、常緑広葉樹が増えることも、落葉広葉樹が消えてしまうこともなかったようです。

こうして枯れたアカマツの下から、燃料として切られなかった落葉広葉樹が伸びてきました。現在の茨木の山間部では、涼しい気候であったころの生き残りとも言える落葉広葉樹の林が、アカマツ林の面積を上回って広がったのです。



秋の里山は彩りが美しく、田のあせではヒガンバナが美しく咲き誇ります。

茨木の山の四季にアクセントをつけるのは「白い花」と「黄色いもみじ」。そして、秋から翌年の春にかけて明るくなる林です。エゴノキやリョウブ、ウツギなどの白い花があるからヒガンバナの赤が鮮やかに感じられ、ウリカエデやコシアブラ、タカノツメなどの黄色いもみじが、イロハモミジやウワミズザクラの赤いもみじに混じるので、山がきれいに色づくのです。紅葉も終わり、冬が近づいて木々が葉っぱを落としたあとは、少し寒い地方の林のような景色になります。お出かけして、どうぞ楽しんでください。

クルビーだより

箕面公園昆虫館 館長 久留飛克明

カマキリは、小学生に人気の昆虫の1つ。飼ってみたいと相談があるが、肉食昆虫は生きた昆虫などのえさを確保することが難しい。カマキリは男子、女子ともに人気で、その魅力は、前足が変化した鎌にある。昆虫は6本足だから安定して歩けるといわれるが、4本足でも問題はない。カマキリは餌になる昆虫が近づいてくるまで景色に粉れるように体を静止させる。前足の鎌で捕まえられる距離に来ると、一瞬で相手を捉える。カマキリの目は、個眼が集まってできた複眼をしていて、私たちの目の作りと異なるが、茶色い体は、周りに溶けこみやすいと私たちも思うようにカマキリも同じ感覚だからこそ茶色の体をしている。私たちの見ている景色と同じように見ているからと言える。その複眼をよく見ると、こちらを見続けているように感じる。偽瞳孔と呼ばれる現象で、本当はこちらに集中しているわけではないと説明にあるが、本当だろうか？秋は、交尾、産卵の季節。春に孵化し、長い幼虫時代を過ごし、自分の遺伝子を残す最後の仕事が終わっている。カマキリは昆虫の世界では、食物連鎖の頂点にいる生き物でもあり、それを支える餌となる昆虫がその場所には多く住んでいたからともいえる。

箕面公園昆虫館 久留飛克明



木々の間が適度に開け、開いた場所が多いので、フクロウやオオタカなどの猛禽類にとっても暮らしやすい森です。

長年にわたり茨木の山の落ち葉や枯れ枝、まきを燃料に利用している間に、山では土がやせてしまい、マツタケと養分をやりとりして生育できる(共生といいます)アカマツぐらいいしか生えない山になってしまいました。そのアカマツの林も、少し大きくなったらまきとして利用するので、背の低いアカマツ林ばかりが広がったそうです。

50年ほど前から、山も里も変化が始まりました。そのころ「松くい虫」と呼ばれたマツノザイセンチュウという外国から来た小さな生きものが、日本中のアカマツにとりついて次々にアカマツを枯らしていきました。また、同じころに都市ガスや灯油、電気の利用が広まってきて、まきや炭の利用が減ってきました。そして、徐々に山の木が忘れられていったのです。



青少年活動センターや利用スポーツ公園などに設けられた施設もいろいろあります。



タニガエル



タヌキ



茨木市環境教育ボランティア 天保好博

シカ

ルリタテハ

自然観察には、子どもたちだけで行ってはいけません。必ず大人といっしょに出かけましょう。また、現地での単独行動はとて危険です。運動に適した服装で、帽子・水筒・救急セットも忘れずに。